豊洲・晴海で計画 「幻の東京万博」とは

動画で「東京ふしぎ探検隊」

#東京ふしぎ探検隊 #コラム

2022/4/10 5:00 [有料会員限定]

Play Video

3月31日、アラブ首長国連邦（UAE）のドバイで開かれていた国際博覧会（ドバイ万博）が閉幕し、2025年の「大阪・関西万博」にバトンが渡された。3月には公式キャラクターも発表され、関西中心に徐メイン会場は現在の晴海と豊洲だ。ここに東雲の一部と台場公園、さらには横浜市の山下公園も加わった。増山さんによると、晴海には日本の建築を中心とするパビリオン、豊洲には外国館中心に展示する予定で、「展示の中身よりも建築物に力を入れていた」という。

豊洲から台場に向けては「プロムナード」と呼ぶ遊歩道を整備して、海を感じながら散策できる場所とした。別会場の横浜から船でやってくることも想定していたようだ。増山さんは「水辺で展開する利点を最大限生かした計画だった」と話す。

このプロムナード、整備こそされなかったが現在も残っている。江東区有明の「東京港旧防波堤」だ。かつては防波堤として機能していたが、埋め立てが進んだことでその役割を終えた。今では埋め立て地の間にある「人が入れない不思議なスポット」として一部で知られている。昨年の東京五輪で話題をさらったスケートボードの会場がこの対岸にあった。

右が東京港旧防波堤。現在は立ち入り禁止となっている。左は東京五輪2020のスケートボード会場となった「有明アーバンスポーツパーク」の跡地

■チケットは100万冊発売 大阪万博や愛知万博でも使われる

1970年の大阪万博では、「世界の国からこんにちは」というテーマ曲がよく知られている。三波春夫の歌として記憶している人が多いかもしれないが、実はレコード会社8社がそれぞれ別の歌手を擁して発表した。三波春夫のほか、吉永小百合、坂本九、山本リンダ、西郷輝彦、倍賞美津子らが歌った。

この手法は1940年の東京万博で既に採用されていた。レコード会社6社が発売し、藤山一郎ら当時の一流歌手が歌ったという。歌詞は一般公募で、北原白秋、菊池寛、西条八十らが選考委員となった。1938年（昭和13年）4月、日比谷公会堂で行われた秩父宮親王の万博総裁奉戴式でこの「日本万国博覧会行進曲」は大々的に披露された。

入場券も売り出した。抽選券付きの回数券（12枚つづり）で、1冊10円だった。チケットは大人気で、100万冊が売れたという。偽造防止のすかしまで入った本格的なチケットで、いかに万博を重視していたかがうかがわれる。

1938年に売り出されたチケットは、実際に抽選が6回行われた。1回目の抽選会の後に国際情勢の悪化で万博の延期が決まったが、その後も抽選会は続き、6回目は1940年に実施した。万博の主催者である日本万国博覧会協会の会誌「万博」も、1944年（昭和19年）3月まで発行が続いた。関係者の「いつか必ず実施する」との強い意志を感じる。

100万冊が発売された抽選券付きの入場券。1970年の大阪万博や2005年の愛知万博でも使われた（東京都中央区の区立郷土天文館所蔵）

ちなみにこのチケット、実は戦後になっても使われた。増山さんによると、大阪万博で3077冊、さらには2005年の愛知万博でも48冊が実際に使われたという。大阪では12枚つづり1冊に付き1枚、愛知では同2枚の特別入場券と引き換えにした。2025年の大阪・関西万博でも使われるのだろうか。

■勝鬨橋は万博会場への玄関口として造られた

計画段階で延期となった東京万博だが、実際に造られた建造物がある。今も残っているのが勝鬨（かちどき）橋だ。

東京・築地と月島を結ぶこの橋は、中央部分が跳ね上がる可動橋だ。国の重要文化財に指定されている。東京都心部から万博会場へ向かう玄関口に架かる橋として、万博に合わせて計画された。海外からの技術支援を断り、日本の技術で造られた。世界へ向けて日本の技術力を誇示する狙いがあった。1970年、大阪万博の年を最後に開閉は停止されている。

晴海に完成した万博事務局棟。その後陸軍の病院に転用された（中央区教育委員会の増山一成さん提供）

晴海には、万博の事務局棟が実際に建てられた。木造2階建ての和風建築で、延べ面積が約5485平方メートルもあったという。開催延期後は陸軍の病院に転用され、戦禍の中で姿を消した。跡地を訪れたところ、今は空き地になっていた。

万博事務局棟の跡地は空き地になっていた（東京都中央区）

1940年といえば、東京五輪も計画されていた。こちらも日中戦争など国際情勢の悪化を理由に開催権を返上した「幻の大会」だが、当時は万博の方が規模の大きなイベントだったようだ。

当時の東京市がまとめた「第十二回オリンピック東京大会東京市報告書」（国会図書館所蔵）によると、1940年の東京五輪の予定経費は約3094万円。これに対し同年の万博は約4450万円を見込んでいた。予算規模も万博の方が大きかったのだ。

東京の湾岸部ではその後何度も大規模イベントが計画された。象徴的なのはバブル期に持ち上がった世界都市博覧会だ。1994年11月3日付の日本経済新聞（地方版）は「鈴木俊一・東京都知事（当時）の世界都市博覧会開催の動機は、幻となった1940年の万博の再現にあると言われている」と指摘している。

「見果てぬ夢」を追い続けた東京の湾岸エリア。次の大阪・関西万博は、どのような夢を描くのだろうか。（河尻定、塚本直樹、高橋丈三郎）